
少女レティナの不幸

雪乃丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女レティナの不幸

【Nコード】

N1909J

【作者名】

雪乃丞

【あらすじ】

至高神によって作られた世界。

そこにある国に生まれた少女、レティナは初代国王生誕祭にて出会った騎士だという青年に引つ張られ連れ去られる。

「俺の下僕となれ」と尊大な態度彼は言うが勿論レティナは帰りたい、しかし脅され帰れない。

騎士のくせにあまり強くない身分不明出身地不明、ついでに意味不明な青年に連れられレティナは旅に出る。

はた迷惑な青年のせいで様々な事件に巻き込まれる少女の運命は！？

いったいいつになれば家に帰れるのか!?

第一話 グレイシアの娘

至高神が生み出した三の大陸のうち一つ。

隣国にイスバルキア帝国を持つ、格式高いパステイ王国。

首都カランにある王城へ一直線に通じる中央道沿い、そこにその店はあった。

やや古風な佇まいの酒場兼宿屋である『グレイシア』。

初代店長、エルディ・グレイシアから何代も続く場所である。

宿屋は貴族もたまに使用する程度に格式はあり、酒場は商人や傭兵、低級兵がよく来る蒸留酒が人気の店だ。

故に、朝昼夜問わずに客は来る。閑古鳥が鳴いたことは一度もない。

祭りの時期となれば尚更で、年に一度しか無いパステイの初代国王の生誕祭ともなれば忙しさのあまりに年配の従業員は倒れてしまう。祭りの見物客や出店の商人、山車を出す芸者、更に高級宿を取れなかった貴族ですべての部屋は埋まってしまうのだ。

たとえ相部屋にしても同じである。祭りの時期はどの宿も利用者がいっぱいだ。

祭りの時期に中央道以外の道を覗いてみれば、寝転がる者もそこに居るほどだった。

祭りの前々日。

この日は祭りの準備として休みだが、既に誰もが忙しかった。

祭りの日は泊り込みの従業員の食料ですら全て無くなると言っても過言ではない為に、業者が引っ切り無しに出入りしていた。

従業員が、もうじき泊まりに来る予約者のために部屋を整えている。

従業員に混じって、一人の少女が居た。

この時期でなくとも従業員に十代の者は多く居たが、この少女はまた格別である。

他の皆が薄い青の従業員服であるのに対し、この少女が着ているのはよく目立つオレンジのもの。

やや癖のある薄い茶の髪には、初代国王が愛した花であり祭りの時期に皆が何処からに付けるトウイラの薄い藤色の花の飾り。

気の強そうな目は緑で、鼻に軽いそばかすがあり、手にははたきが強く握られている。

とても地味な少女であった。

「タールにトッド！ 三号室のベッドのシートがよれてる！

ベスカ！ 二階右三番目と三階右一番目の花の向きおかしいでしょ！」

廊下を歩きながら従業員に声をかけていく。

「は、はいっ！ お嬢様！」

声をかけられた従業員は姿勢を正すと走っていく。

その後姿を見送りながら、他におかしな点は無いか見ていく。

その目つきは熟練のものだ。

埃一つ見逃さず、多少おかしな向きでも直していく。

そんな少女の視線があるところに止まった。

二階の客室に置かれたソファ。

クッションに挟まれたその隙間にそつと指を入れる。

ややざらつくものを感じた。

「もっ」

そう言っと、手早く掃除を始める。

間違った場所は客に気付かれる前に手早く修正。

それが、敏腕経営者だった母から言われたことである。

「レファ！ 六号室のソファにゴミたまってた！」

ついでに、その部屋の掃除を担当した者に言っておく。

これが毎日の仕事であつた。

少女はレティナ・グレイシア。

その名からも分かる通り、『グレイシア』の現店長バッドロ・グレイシアの娘である。

ただの娘ではない。

『溺愛されている』娘である。

敏腕経営者の母はむしろ娘を厳しく育てたものだが、父は違う。

箒やはたきを持って、従業員と同じことをしていれば父が止める。

位こそは無いものの貧乏貴族よりはずっと金持ちの家に生まれた為に望めば高いドレスを与えられるのに、娘がそういったものよりタオルを望んだ。

そのタオルで何をしたかと思えば、客の靴磨きである。

その他に何を望むかといえばパンやお菓子だ。

自分は食べない。

従業員に混じる子供や、貧乏な子供に渡す。

お菓子や花より、洗剤を好む。

ドレスより従業員服を好む。

金持ちの娘でありながら、皆に混じって作業をするのだ。

勿論、彼女に給金はある。

だがその量は似た年齢の従業員とさして変わらない。

お小遣いの方がとても多い、しかし給金の方がレティナにとってあ

りがたいものである。

祭りの時期は父親によって無理やり仕事から外されているため、ただ手伝いしか出来ない。

普段と同じことをしようとすれば、いつもは何も言わない母親から叱りが飛ぶのだ。

「明日の飾りはやっぱトウイラにするか、それとも……」
ぶつぶつと呟きながら一階に下りていれば、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ティナ、ティナ!!」

中年の父親が、玄関に立って此方と呼んでいる。

「出た……」

嫌そうに顔を顰める。

レティナが父親は言うのだ。

『年頃の娘がこんなはしたない事をするんじゃない』と。

無視しようかと思ったが、それでは他の従業員が哀れである。
やれやれと思いながら父親の元まで歩いていく。

その歩く仕草は、母親の仕込んだ客に不快感を与えないものである。

「ティナ、お前はまたこんな事をしているのか」

「お父様、いい加減同じ事を繰り返すのは止めて」
二人同時に言う。

「お父様、しつこい」

父親が何か言う前にすかさず言った。
高貴なる女性は奥ゆかしくするもの。父親もそんな娘を期待した
のだが、残念ながらそうは育たなかった。
先手必勝。油断大敵。
勝機は絶対逃さない。

そして、とても正直な娘に育ったのだ。
自分の意志を隠して笑っていられない。

「ティナ。そろそろお前も結婚相手を見つけないければならない年
齢になったのだ。」

このままでは行き遅れてしまう」

娘の将来を心配する父親として当然の事を言う。

「私はまだ十六よ。」

行き遅れになんてまだなっていないから」

この国の婚期は二十歳から。

レティナの年齢ではまだまだ早いものだ。

婚約ならば、多いのだが。

「それに、結婚する相手なんて自分で見つけるわ」

「そんな事を言って私を困らせないでくれ。」

貴族が商家の息子かと婚約して、早く安心させてくれ」

父親の心配ももつともなものだ。

「で、子供産めと？ 嫌よ、好きじゃない相手と結婚だなんて嫌！」

「私とアリッサは愛しあっている！！」

両親に決められた相手であるレティナの母と、父は結ばれた。

今でも互いに愛し合っているのは娘の目から見てもよく分かる。

「お父様とお母様は別よ！」

親に決められた相手と愛し合えなんて無理だもん！

愛する相手は自分で決めるから！！」

そう言うとはたきを父親に投げて玄関から外に逃げる。投げるといつても十分にキャッチできる優しいものだ。

「ティナ！ まだ話は終わっていないぞ！」

「知らない！！」

そう叫ぶ。

中央道をしばらく走って振り向けば、父親の姿は無い。レティナは軽く息を吐いた。

「・・・・・・・・バーカ」

壁に凭れて呟く。

空を見上げれば、よく晴れていた。

雲は僅かにしかない。

旅行者を乗せた馬車が何台も行き来している。

首都はとても広い。

貴族御用達店や『グレイシア』のある中央区。 首都勤めの貴族の

邸宅が集中する東地区。

商業専門の、首都の玄関口である南区。 工業を扱う西区。

そして、王城がほとんどを占める北区。

何処へ行くにも、馬車が役に立つ。

観光の案内にも使われているのだ。
馬車の道と、歩行者用の道。

何処を見ても、もうすぐ行われる生誕祭りで浮き足立っておりトウ
イラの花が飾られている。

「……………どうしょ」

あんな感じに飛び出してしまった。
今戻れば父親が待っている。
喧嘩するのは避けたい。

暇を潰すしか無いのだ。

選択肢は一つしかない。

あそこに行くっ。

「よし」

そう決めると、少女の足はそちらに向いた。

ふと誰かが肩を叩く。

振り向けば緩やかな金髪に白いワンピースの少女が柔らかく笑いかけていた。

「あ、ルイエ」

「こんにちは、レティナ」

ルイエは、貴族の令嬢だ。

姓は知らない故に、貴族としての格は知らないがその一挙一動は洗練されていることから相当高位であるだろう。

伯爵か、それとも侯爵か。　もしかすると、公爵やもしれない。

何にしたって、ルイエは貴族である。
同時に、レティナの友人である。

二人の出会いは昔の話だ。

多少の事件があり、それ以来仲良くなっている。

「どうしたの？ この時期忙しくない？」

この時期に忙しくなるのは商人だけではない。

貴族の館でも、客人をよく迎えるようになるのだ。

勿論、王宮での舞踏会もある。

忙しさでは貴族も商人も、多少の違いはあれど同じなのである。

「抜け出してしまいました」

口調はあまり悪びれていない。

「今頃、先生が探しているでしょう」

「……戻らなくて良いの？」

心配そうに問えば、ルイエはにこにこ笑う。

「どうやら良いらしい。」

怒られるだろうが。

「でも、帝国の人が来るって聞いたんだけど」

この大陸で帝国といえばイスバルキア帝国である。

最も巨大な勢力と版図を誇り、歴史も非常に深い。

確か現在の皇帝で第百八十七代目だったはずだ。

「ええ。第三皇子ですの。」

でもだからと幼い頃より幾度も繰り返し習ったことを、また習う必

要は無いではないですか」

「そんだけ丁重に扱わなきゃいけない相手なんですよ」

「そうですね」

やはり悪びれていなかった。

しかしルイエがそう言うならそれで良いのだろう。

レティナも笑い返した。

「レティナはどうしたのですか？

この時期はとても忙しいではないですか」

「え、あ、うん」

苦笑いをしながら頷く。

此処に来るまでの経緯を説明すると、ルイエは鈴の様な笑い声を上げた。

「レティナも、大変ですね」

「まあね。

楽しいから良いんだけど」

そう言うとお互いに笑った。

お互い、課せられたことはそれなりに楽しんでいるのである。

ただたまに息抜きもしたくなる、それだけで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1909j/>

少女レティナの不幸

2011年2月1日16時07分発行